

「イエスに触れていただこうと」

マルコの福音書 10 : 13 - 16

November.13.2022

マルコの福音書 10 : 13 - 16 (パワポ)

Preface

今日は幼児祝福礼拝ですので、子供たちを祝福することについて考えていきたいと思います。

「祝福」という言葉ですが、そもそも世間一般的に言う「祝福」という言葉から連想することと、聖書が私たちに教える「祝福」とには違いがあります。

もちろん、私たち世間一般で考えられている「祝福」と、聖書の言う「祝福」には重なる部分もあります。

事故や災いから守られること、病が癒されること、物質的経済的に豊かになること、試験に合格する事、中々開かれなかった道が開かれること等々、「この地で生きていく上でこうだったらいいなあ」と思う希望や望みのことも「祝福」という言葉を用いて聖書は表現していますが、それが「祝福」の本質・本体ではないことも聖書は教えてくれています。

先週の召天者記念礼拝の時に見た聖書箇所ピリピ書 4 章にあったように、貧しくて、乏しくて、袋小路に思えるような所にあっても、または、富んでも、満ち足りていても、どんな境遇にあっても満足できる根拠となるものを頂くこと、これを聖書は究極的に祝福と言います。

じゃあ、その祝福の根拠となるものとは何なのか？

もう一度、マルコの福音書 10 章の言葉を読んでみます。

マルコの福音書 10 : 14 - 16 (パワポ)

イエス様は、「このような者たちでなければ神の国を受け入れることも出来ませんし、神の国に入ることも出来ません」と仰りながら、子どもたちを懐に抱き、子どもたちの上に手を置いて祝福いたしました。

イエス様はここで、子どもたちに執った行動を通して、神の国と祝福を同等に位置付けられました。

つまり、神の国を受け入れること、神の国に入ることこそが祝福であり、どんな境遇にあっても満足出来る根拠だということです。

イエス様は、この祝福の本質である神の国を子どもたちが受け入れることが出来るようにと、子どもたちを祝福いたしました。

当然ながらイエス様には、子どもたちにとって何が一番大事なのかを誰よりもよくご存じでありました。

神の国です。

Part One

神の国こそ、子どもたちにとって最も大事なものです。

神の国という祝福が、子どもたちにとって最も大事なものです。

なのに弟子たちは、そのことが良く分かっていなかったようです。

「神の国については、大人になってから！ まだまだ神の国について知る前に、やるべきこと、知るべきことが沢山あるでしょ！ 子どものくせして神の国について知ろうなんぞ、100年早いは！」と思ったかどうかは良く分かりませんが、そこまで思ったんじゃないだろうかと思ってしまうほどに、弟子たちは、子どもたちをイエス様のところに連れていくことを拒み、怒り、邪魔までしました。

邪魔までしたんです。

「イエス様の弟子だ」と自他ともに認める者たちが、あたかもサタンの手下でもあるかのように、子どもたちがイエス様のところに行って、神の国という祝福を受けることを邪魔までしました。

弟子たちが思っただろうことを私たち風に言うならば、「いやいやまだイエス様についてとか、教会についてとか、聖書について知る前に、勉強して、運動して、合格して、就職して、家庭をもって・・・、その後でも十分間に合うから大丈夫！」といったところでしょうか。

それとも、「霊的なことについては、もっと知的になってからでも遅くないし、もっと世間一般の知識や常識をたくさん身に付けてから、霊的なことについては関心を持ちなさい」といったところでしょうか。

でもそんな風に思っている人々に、イエス様は仰います。

マルコの福音書10：14（パウポ）

私たち大人が子どもたちに対して最低限出来ること、または、やらなければならないことは、子どもたちがイエス様のところに行こうとすることを、またはその機会を奪ってもいけないし、妨げてもいけないということです。

なぜならば、イエス様のところに行くことが、イエス様のところに行って神の国を受け入れることが、大人たちばかりか、子どもたちにとっても唯一無二の祝福だからです。

子どもたちの祝福を願うならば、必ずやイエス様のところに連れて行かなければならず、イエス様の懷に抱かれる必要があるからです。

イエス様を通してでなければ、祝福の根拠である神の国を受け入れることも、

入ることも出来ずに、ありとあらゆる境遇の中で、その一つ一つの境遇にいちいち右往左往し、満ち足りることも出来ず、満足することも出来ず、何をしても不安で、不満で、空しくて、心底喜べなくなってしまうからです。

例え事故や災いにあっても、病にあっても、思い描いた道でなかったとしても、神の国に入れるんだという信仰のある人生は、祝福となります。

逆に、大きな事故や災いに会うこともなく、大病を患うこともなく、意外と思いを描いたような人生を歩めたとしても、神の国という祝福が伴わない人生ならば、祝福の人生とは言えなくなってしまうでしょう。

ルカの福音書16章を見ますと、イエス様がこのことを明瞭に示すために、最終的な明暗がくっきりと分かれた両極端な二人の人物の話をしします。

ルカの福音書16：19－31（パワポ）

あれも手に入れ、これも手に入れ、あんな物も食べ、こんな物も食べ、あそこにも行き、ここにも行き、あんな人にも出会い、こんな人にも出会い、あんな所にも住み、こんなところにも住んだとしても、それが、神の国に繋がるものであるという信仰がないならば、最終的な究極的な祝福にはなり得ません。

イエス様は真剣です。

神の国という祝福に与ることと与らないことの深刻さについて、真剣に語りになります。

この神の国という祝福に入ることには、早すぎるという事はありません。

一概に早ければ早いほど良いということではないでしょうが、早すぎることはありません。

日本に初めてキリスト教を伝えたフランシスコ・サビエルのことを日本史の授業で皆さんも学んだことと思いますが、あのフランシスコ・サビエルがこんな有名な言葉を残しました。

「子どもが7歳になるまで私に預けなさい。その後は、あなたが、その子にしたいようにしなさい。」

この言葉を基にして、世界中の多くの教会は幼稚園を運営するようになりました。

そして、子どもたちの心に神の国を抱いてもらうよう努めてきました。(だから、めぐみ教会にはマナ愛児園がありますし、土浦のカトリック教会にも幼稚園がありますよね)

本来幼稚園の務めは、子どもたちに、大人が決めた教養を身に付けさせることとか、英才教育を施すこととかではなく、神の国をその心に植えることです。

その心に神の国を抱けば、あとのことは自然とついて来るようになっていま

すよね。

ザビエルのような言葉を自分なりに解釈し利用して、または悪用して、世の中に初めて社会主義政権国家をロシアに樹立させたレーニンは、「私に4歳までの子どもたちを預けなさい。そうすれば、私が彼らに植えた種は、一生涯決して引っこ抜かれることはないだろう」と言いました。

日本語には、「三つ子の魂百まで」という言葉がありますが、この言葉の持つ真意と信仰的適用を、私たちこそ真剣に、深刻に考えて行かなければならない言葉ではないかと思うんです。

Part Two

私自身生まれた時から、幼い私のことをイエス様に触れていただこうと、イエス様のところに連れて行ってくれる大人が周りにはいませんでしたので、神の国という祝福について知ることもなく20歳まで生きました。

そういう中で育まれた結果、私の人生の目標は、お金持ちになることと女性にもてるようになることとなりました。

この二つのことを叶えることが、私の人生を **Happy** にしてくれ、楽しいものにしてくれると思っていましたし、この二つのために、物事を成したいと思っていたと言っても過言ではないぐらいに、そのこと以外の当時の私にとっての目標と言いましょうか、人生の目的はありませんでした。

もちろん、お金持ちになることや異性にもてるようになることが悪いことだとか、いけないことだとかという何の面白味もない、つまらない話をしたいのではありません。

そのことがこの世界においてすべてであるかのように思っていたこと、その程度のことしか神のお造りになったこの素晴らしい世界に見出すことが出来なかった霊的視野のない肉の人でしかなかったこと、

またもし、そこで終わってしまっていたら大変なことになっていた、祝福の本体を知ること、味わうこともない、人生における真の大損害と結末を被った人生になっていたかもしれないということを思い返すわけです。

今でもその時の心情を思い返すことが出来ますが、例えば、厳しい剣道部の練習に励んでいる時も考えることは、当時好意を寄せていた女子が私の思いに応じてくれることとか、辛いアメフト部の練習や筋トレをやっている、「これは、女の子にもてるためだ」とかと、思っていました。

また、人が所有していない高価なものを持っているとか、人が行ったこともない外国に行ったことがあるとか、有名な人を知っているとか、そういうものが私という人の価値を上げてくれると思い、思わされていたように思います。

真理ではない真理のようなもの、成功ではない成功のようなもの、命ではない

命のようなもの、愛ではない愛のようなもの、自由ではない自由のようなもの、笑いではない笑いのようなもの、平和ではない平和のようなもの、そして、神ではない神のようなものが、私たちを幸せにしてくれると、命を豊かにしてくれると、繁栄を約束してくれると言われ続け、教え続けられている世界。

それらのものの前に立つと、心が揺れ、誘惑を受け、魅力を感じ、その力は相当なもので、それらの偶像は、まかり間違うと、本当に私たちに命と繁栄をくれるものだと錯覚してしまうような世界。

そうして、そんな壊れた世界に置かれた、壊れた私、壊れたあなた。

唯一まことの神の代わりの神のようなものゆえに、息が詰まるような思い。

そこからの解放が神の国であり、神の国という祝福です。

そして、その祝福を知っている者として、一日でも早く子どもたちに伝え、知ってもらおう使命を神様から委ねられているのが私たちです。

「祝福」という言葉を英語で言いますと、**bless** と言いますが、これは **bleed** という「血を流す」という言葉から出て来た言葉だという事をご存知でしょうか？

「血を流すこと」、祭壇に献げられたいけにえの血をもって祭壇を聖めるということから、「祝福する」という言葉が出て来ています。

つまり、**bless** という「祝福」には、必ずや **bleed** という「血を流す」という行為が伴わなければならないんです。

即ち、これを聖書的に解くならば、世の罪を取り除く神の子羊としてこの世に来られたイエス・キリストの十字架の贖いとその血潮を前提にしたものが、「祝福」だということです。

キリストの血潮にこそ祝福があるという事を、また、そのキリストのところに来て神の国を受けることこそが祝福であるという事を、言語学的にも解くことが出来てしまうんです。

だからこそ、私たちがもし、子どもたちに祝福を望むならば、イエス様のところに連れて行かなければなりません。

宗教の話をしているわけではありません。

真理の話をしているんです。

Part Three

じゃあ、どのようにイエス様のところに子どもたちを連れて行くのか？

もちろん、教会に連れてくることも、大切な手段のうちの一つでしょう。

しかしそれよりも大事なのが、神の言葉の前に子どもたちを連れていくことです。

イエス様のところに子どもたちを連れて行く最も大事な現場は、家庭です。そして、その聖なる責務を主から任せられているのが親、または大人たちです。子どもたちをイエス様のところに連れて行く尊い働きは、教会である以前に、家庭です。

もちろんだからと言って、教会や教会学校が必要ないということではありません。

むしろ、子どもたちを祝福へと導く同労者として、教会や教会学校はなおさら必要です。

では、何もって、どんな道具をもって、子どもたちを神の国という祝福へと導くのか？

私たち大人のイエス様を愛する愛、子どもたちを愛する心、そして、神の言葉を愛する心です。

礼拝の始めに、聖歌353「世にも尊く清きふみあり」を賛美いたしましたが、神学生の頃一番好きな讃美歌でした。

でも先ほども言いましたように、私はクリスチャンホームで生まれ育ったわけではないので、この歌詞にあるような、母のひざに座って、母の読んでいる聖書のお話を聞き、その聖書のお話が今も私の心に刻まれていて、母が大事に使い古した聖書を見ると胸が熱くなるなんていう経験はありません。

ですが、この賛美を神学生の頃初めて歌った時から、歌う度に、何だか自分にそういう温かい思い出や感謝の記憶があるように感じてしまって、この賛美を歌うと心が喜び、感動があるんです。

またこの賛美を歌いますと、以前読んだ本の内容が思い出されるんです。どういう話かと言いますと、神学者たちの討論の話なんです。

一人の神学者が、「いややっぱり、新改訳聖書の日本語訳が一番だよ」と言いますと、「いやいや、共同訳聖書こそ、原語に忠実な訳となっていて素晴らしいですよ」と、他の神学者が言いました。

そしたら、また他の神学者が、「いやいや何を仰いますか！ リビングバイブルこそ一番分かりやすく、読みやすい聖書です！」と言い合いながら、喧々諤々と討論が繰り広げられていました。

すると、その様子を黙って聞いていたもう一人の方がニコッと笑いながら、「私が思うには、私の母が語ってくれた聖書のお話が一番いいように思えます」と言いました。

Part Four

子どもたちに、イエス様の愛を、神の国を、祝福を宣べ伝えるための道具は、聖書の言葉ですが、ただの聖書の言葉では道具になりません。

親や教師や大人たちの人生そのものによって翻訳された神の言葉、聖書の言葉は、子どもたちに最も大事なことを伝えるための最も強力な道具になります。

私たちの心に刻まれて、私たちのものとなり、私たちの肉となって血となって、心がこもり、感動があり、私たちの内で人格化している神の言葉が道具となるんです。

だから、7節でこのように言うわけです。

申命記6：7（パワポ）

これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい。

「これ」とは、私たちの内で、人格をもって刻まれている神の言葉、聖書の言葉のことです。

今、めぐみ教会の教会学校では、1年半ぐらい前からでしょうか、教育主事のヒムチャン先生の指導の元、ZOOMを用いて、月一回、子どもたちの聖書通読会が行われています。

これまでマルコの福音書、エステル記を読み、今は使徒の働きを読んでいます。

我が家の次男と三男もこの聖書通読会にい出席させていただいておりますが、最初始める時には、子どもたちに大きな葛藤がありました。

なぜならば、聖書通読会が行われる金曜日の午後7時は、「ポケットモンスター」をテレビで放映する時間だからです。

しかも、その前の6時30分から7時までは、「妖怪ウォッチ」の時間です。

子どもたちにしてみれば、週に一度のゴールデンタイムなのですが、いざ聖書通読会を始めてみたら、「ポケモン」や「妖怪ウォッチ」よりも聖書通読会の方が楽しくて、ポケモンも妖怪ウォッチも見たいと自然と言わなくなりました。（でもまあ、たまにYouTubeで見ているんですけども・・・）

Conclusion

教会の牧師と教師と家庭が協力をして、子どもたちの心に、神の愛を、神の国を、主イエスの祝福を植える尊い働きに何にも勝る価値を見出して、成そうとしていることが、たまらなく嬉しいです、感謝です。

今日の聖書箇所マルコの福音書に登場してくる、子どもたちをイエス様に触れていただこうと連れてきた大人たちのその行いを、現代日本においても、この土浦めぐみ教会においても実践出来るように導いて下さっている主なる神様に感謝しかありません。

イエス様に触れていただいた子どもたちが、どんな素晴らしい実りを実らせて頂くのか楽しみです。

最後に第二ヨハネを見て、終えたいと思います。

ヨハネの手紙第二 4節 (パウロ)

(2回読む)

めぐみ教会にいる、また繋がっているすべての子どもたちが、真理のうちに歩む子どもたちとなることを祈らずにはられませんし、そのために導きを求めながら、共に努めていきたいと思えます。

お祈りいたしましょう。

祝祷：マルコの福音書10：14

子どもたちを～